

## ミッシェル・セールの思想における地理学と哲学

米 山 親 能

## I、気象学

今年、西暦2002年の夏には、中央ヨーロッパ各地で未曾有の大水害が起こり、歴史的な貴重な文化遺産を誇る当地の町々が水に浸かり深刻な被害を被った。このような大水害は百年に一度、二百年に一度起こる災害とも、また最近の地球温暖化に起因する異常気象による災害だとも言われるが、そのような大水害がどのような原因でいつどこで起こるのかは、精確には誰にも分からない。ミッシェル・セールは、その著作『アトラス』*Atlas* のなかで、このような気象現象について次のように述べている。

状況 *circonstance* という語は、誰でも知っている自明の意味では、ありうることにせよありそうもないことにせよ、偶然の出来事に近いものを意味している。それゆえ、諸状況に左右される時間 *temps* は、予期できない偶発的な天候 *temps* ときわめて似通ったものとなる。かつてパリの最も上流側にあったマリー橋は、解氷によってセーヌ河に押し流されてきた氷塊やごみくずの圧力によって崩れ落ちてしまった——誰がそれを予測できただろうか——そして二世紀ののち、アンヴァリッド橋も同じ運命をたどった。三番目の橋が崩れ落ちるのはいつだろうか。それは状況 *circonstances* によると言われる。<sup>(1)</sup>

気象現象はこのように予測のむずかしい、不規則なものである。日本列島はヨーロッパとは比較にならないほど自然災害の多い地理的条件下に位置している。最近の気象予報は、台風予報をはじめとして、静止軌道上の気象衛星から送られてくる画像やデータを駆使して、かなり精確な予報ができるようになった。しかし、それでもなお、局地的な集中豪雨や地震の予測などはほとんどお手上げの状態である。いつ起こってもおかしくないと言われる東海地震の観測態勢と予知体制が整えられてすでに久しいが、東海地震はなかなか起こらず、逆にそれをあざ笑うかのように、誰も予想していなかった阪神淡路大震災が起こった。阪神淡路地区にこのような大地震が起こるとは、地震専門家の誰が予測したのだろうか。現在の科学技術をもってしても、地震や気象といった自然災害の予測はきわめて困難なものである。

自然科学は、自然のもろもろの現象のなかに潜む法則を発見し、発見されたその法則によって、様々な現象を予測したり、時には人間の手でそのような現象を作り出したりする。例えばハレー彗

星が次に何年後に地球に最接近するかは、地球とハレー彗星の軌道計算によって、ほとんど秒単位の精確さで予測できる。日食や月食などの天体現象も同様である。こうした自然現象は、法則さえ解明されれば、その法則によって何の狂いもなく精確に数値がはじき出される。すなわち、状況にはよらないのである。こうしたものには、天気予報のように、予報図を書いたり、予報体制を整えたりする必要はない。ここには法則による科学と、状況による科学とがある。セールはこのような二種類の科学の相違を次のように述べている。

いくつものテレビチャンネルが、〔人工衛星からの〕リアルタイムの気象の動画映像<sup>アニメーション</sup>によって、無数の視聴者に楽みな情報を提供しているけれども、今日、海王星の情報に関心をもつ視聴者がいるだろうか。かつては厳密で完璧な古典力学とその決定論に熱中したが、今ではすっかり興味を失った大衆の関心を、予報や確率、風にはためく旗や揺れ動く炎のカーテンのように渦を巻く流れのようなものが、奪い取ったのだろうか。ナポレオンの最終的な敗北は、イギリスの古い師たちの逆襲だったのだろうか。直線的な理性はつい先頃まで、気象よりも惑星軌道のほうを好んでいたのだったが、今ではこの流動的な気象の動画映像<sup>アニメーション</sup>のほうが、諸惑星の軌道よりもわれわれと世界との関係に縁の深いものになっているのだろうか。われわれは、宇宙<sup>コスモス</sup>の静謐な秩序のなかで生きているというよりも、予測不可能なこの流動性によって生きているのだろうか<sup>(2)</sup>。

ここで述べられている海王星については、1845年、フランスの天文学者ル・ベリエ Urbain Jean Joseph Le Verrier (1811-1877) が、隣接する諸惑星の軌道計算によって、それらの惑星の運行の乱れから未発見の惑星の存在を予言し、その位置も計算した。ほどなく、ドイツの天文学者ガレ Johann Gottfried Galle (1812-1910) がその位置に実際に惑星を発見し、その惑星が海王星と名づけられた。このことはまさしく科学の勝利であり、天文学史に燦然と輝く事実であり、一般によく知られたことである。しかしながら、この同じル・ベリエが、当時主要な諸都市に配備されたばかりのモールス電信の利用や、クリミア半島の探検の際に認識した必要性に鑑みて、1855年2月19日に世界最初の天気図を書いたということを知っている人は誰もいない、とセールは指摘する<sup>(3)</sup>。

セールによれば、「イギリスでは、1677年の法律によって、『雨乞い師と天候の占い師』は火刑に処せられると定められていた<sup>(4)</sup>」とのことである。天気予報の類は、迷信的な雨乞いや占いであって、学問でも科学でもなかったのである。このことはごく最近までそうだったのであり、同じくセールによれば「イギリスの国会でこの法律が失笑のなかで廃止されたのは、ようやく1959年になってからだ<sup>(5)</sup>」のである。「状況による」ような学問は、近年まで学問とは考えられてこなかったのである。このことの別の証拠として、セールは次のようなエピソードを紹介している。

ナポレオンとラプラス<sup>(6)</sup>の出会いと、世界体系における神の役割についての、彼らの短期間ではあるが活発なやりとりについては、誰しも記憶にとどめているだろうが、アラゴー<sup>(7)</sup>は、気候という主題にまつわる、同じ皇帝とラマルク<sup>(8)</sup>との、あまり知られていない出会いを、われわれに思い出させてくれる。ラマルクは気象学にかかわる多くの著作を著していたのである。科学アカデミーの、とある例会のうちに、偉大なる来訪者のために学者たちはめいめい著書一冊を贈呈する手はずになっていた。会場に入って来たナポレオンは、一列に並んだ招待主たちに順々に挨拶をして件の博物学者の所まで来たとき、厳しい口調で訓戒し、雲の観測などはやめて、植物や軟体動物の研究に戻るようにと要請したのだった。年老いたラマルクは押さえきれずに嗚咽したと、アラゴーは記録している。幾何学者にして戦略家の彼は、すでにモスクワの冬とワートルローの雨を予感していたのであろうか<sup>(9)</sup>。

フランス皇帝ナポレオンが、モスクワの冬の予想以上の厳しさゆえに、敗北し没落したことはよく知られている。「余の辞書には不可能という言葉はない」と豪語したと伝えられる、この意志強固な皇帝も、予測できない天候には勝てなかったわけである。ラマルクの気象や雲の観測にかかわる著作を、もう少し熱心に読んでいれば、モスクワの冬の厳しさも、ワートルローの戦いの日の天候も、考慮に入れた上でもっと違った軍事行動ができたかもしれない。セールが示唆しているように、気象学に手を染めたラマルクを叱責したあの日に、ナポレオンの運命は決まったのかもしれない。戦争の勝敗も、ナポレオンの強い意志ではなく、天候・気候という状況によって決定されたのだろうか。ナポレオンの強い意志も予測できない状況には歯が立たなかったということになる。それゆえ意志や法則が貫徹するためには是非とも「状況」を除去する必要がある。

## II、地理学

デカルトは有名な『方法叙説』のなかで言ったものである。人は「どこかの森でたまたま道に迷っても、ある時はこちらへ、またある時はあちらへと、さまよい歩くべきではないし、ましてや同じところにじっとしているべきでもないだろう。つねにできる限り同じ方角に向かってまっすぐに進むべきであり、最初にその方角を選ぶことを決心したのが、おそらくは単なる偶然にすぎなかったにしても、少々の理由でその方角を変えるべきではない<sup>(10)</sup>」と。これもまた「余の辞書には不可能という言葉はない」と言ったナポレオンと同じ方法論である。森のなかのいかなる障害もものともせず、つまりもろもろの状況を排除して、まっすぐに突き進めという教説だからである。

このようなデカルト的直線はすべて一次方程式によって表すことができる。だから図面を描く必要はない。その直線の方程式さえ分かれば、何時間後にはどの地点にいるか精確に分かる。先ほどの惑星軌道は多くは円形もしくは楕円形の軌道を描いており、その軌道を表す方程式は、デカルト的な直線よりもずっと高次で複雑なものになるが、方程式であることに違いはない。それゆ

え当該の惑星が、何ヶ月後にどこの位置にあるかは計算式によって精確にはじき出される。したがって惑星の進路にも、図面や地図は必要ではない。

しかしたとえば、複雑に入り組んだ海岸線はどうだろうか。この複雑な線は何らかの方程式に従っているのだろうか。このような海岸線はきわめてフラクタルなものであり、不規則性を唯一の規則としている。このようなものはいかなる方程式によっても表すことができず、ただ忠実に写し取るより他はない。セールによれば、予測できない偶然は、一つの対象を記述しうる最も短い数列が、次元もしくはプログラムに等しいときに起こるとされている<sup>(11)</sup>。このことは日常言語で言えば「それを複製せよ」と言うことと同じである。海岸線に限らず、大地の地形はすべてそうである。「二つのタイプの学問のみが存在しているのではなかろうか」、とセールは言う。「法則の学問と複製の学問、空虚な宇宙の学問と充満した世界の学問、一方に幾何学や力学があり、他方に地理学がある。それゆえ、もろもろの風景の記録である地理学が、二つの基本的な知の一つとなる<sup>(12)</sup>。」

したがって海岸線や地形は、丹念に測量して地図を作製しなければならない。地図とは縮小した一つの複製なのだ。どうしてわれわれは、たとえば諸惑星の軌道を実際には決して地図に描いたりしないのだろうか。宇宙の法則によって諸惑星の位置は予測されるからである。動きや位置が予めわかっている場合、航跡図を作って何になるだろうか。法則からそれらの動きや位置を演繹するだけで十分である。これとは逆に、入り組んだ海岸線、地形の起伏、われわれの住んでいる町や村の景観や、人の顔かたちや、指紋といったものは、いかなる法則にも従ってはいないがゆえに、地図や図面を必要とする。これらのものは法則から無限に隔たった特異性であり、独自性であり、個性なのであり、世界に一つしか存在していないものである。哲学的な言い方をするならば、これらは理性ではなく、実存にかかわる問題なのである。このような複製と法則についてセールは次のように述べている。

したがって、肖像とか複製とか描写とか呼ばれるシミュレーションは、長いあいだ、原理が見つからないか欠如したため遅れたものと見なされてきた。厳密な諸科学は、正当な理由から、また時には人文諸科学までもが、誤った理由から、地理学者や解剖学者や都市計画家たちを蔑んだのだが、明証的な真の幾何学と、地形などに適用される曖昧な幾何学<sup>ハード</sup>のあいだの隔たりが嘲笑の的となったのだ。厳密な法則とは、結局のところ最良の記憶であって、何も蓄えておく必要がないがゆえに軽快である。それに対して、特異なものは、記憶を保持するために、いくつもの図面を描きそれらを保存しなくてはならないがゆえに鈍くて重いのである<sup>(13)</sup>。

ここで述べられているように、厳密な法則は最良の記憶であるがゆえに、法則による学問は明敏で知的であるが、法則によらない学問、たとえば気象学や地理学のような学問は、膨大なデータを必要とし、長い距離を一步一步踏破して調査しデータを収集・蓄積しなくてはならないがゆえに、

鈍重で肉体労働的である。

### Ⅲ、隣人

このような地理学的な距離の問題と関連させながら、隣人とは誰だろうかとセールは問う。もちろん語義的には、すぐ隣に住んでいる人であって、遠い距離を一步一步踏破し苦勞して探し回る必要はない。しかし、「隣人を愛せ」というキリスト教の格言は、「隣の人だけを愛せ」ということだろうか。たとえば、地球の裏側に住んでいる人は隣人ではないから愛さなくてよいのだろうか。みなから疎まれ、世間からのけ者にされている者は近くにいても隣人ではないのだろうか。このような問いは、倫理的・宗教的な問題であるばかりでなく、距離や隔たりが問題になっているという意味で、地理学的な問題でもあると言えよう。セールはエルジェ Hergé の有名な漫画「タンタンとミルーの冒険」シリーズの一つ『チベットのタンタン』<sup>(14)</sup> を引き合いに出してこの問題を提起している。

このチベットへの冒険物語の発端はタンタンの見た夢である。タンタンは夏のバカンスを過ごしていたリゾートホテルで、相棒のキャプテンとチェスをうっているとき、キャプテンの長考中にととうと居眠りをして夢を見る。それは、以前に知り合った中国人の少年チャンがタンタンに助けを求めている夢である。タンタンはこの夢に驚いて「チャアアア・・・ン！」と大声で叫びながら目を覚ます。西ヨーロッパから見ればほとんど地球の裏側の、遠い中国に住んでいるチャン。タンタンとは、言語も、文化も、習慣も、肌の色も違うチャン。これだけの隔たりがあれば、一般的には、隣人とは言い難い。その遠方の友人が夢のなかでタンタンに助けを求めている。折しも新聞で飛行機事故のニュースが報じられ、その飛行機に偶然にもチャンが乗り合わせていたことが判明する。その飛行機は香港からヨーロッパへ向かう途中、ヒマラヤ山中に墜落したのだ。新聞で報じられた捜索隊の報告によれば、生存者はゼロとのことである。しかしタンタンは、チャンがヒマラヤ山中で生存しており、自分の夢に出てきて助けを求めたのだと確信して疑わない。彼は周囲の止めのを振り切って、危険も顧みずにチャンの救出のためにヒマラヤ山中へと向かう。

ヒマラヤの玄関口カトマンズから、小さなキャラバン隊を組んで、タンタンとキャプテンの一行は徒歩で一步一步、中国国境のヒマラヤ奥地へと進んでゆく。これはまさに地理学上の冒険である。細い山道を登り、深い谷川を粗末な丸木橋で超え、何泊もの幕営の後に、タンタンとキャプテンとシェルパたちは、飛行機の遭難現場に到達する。遭難現場の付近で彼らが見たものは、雪上にくっきりと残されたヒマラヤの雪男の大きな足跡である。シェルパたちは雪男を恐れて、荷物を投げ出して逃げてしまう。結局タンタンはキャプテンと二人きりになる。その後、幾多の困難と生命の危険の末に、二人は、奇跡的にもヒマラヤの雪男の洞窟にかくまわれていたチャンを発見し、救出する。

タンタンはこの地球の裏側に住む友人を救出するために、命の危険をも顧みず、ヒマラヤの高山に赴き、幾多の危険を乗り越えて、ついにチャンを救出する。まさしく人道主義的な美しい行動で

ある。文化も、言葉も、人種も違う遠く離れた友人であっても、チャンはタンタンにとって隣人なのだ。タンタンを突き動かしたのは彼の隣人愛なのだ。心優しいタンタンの勇氣ある行為に、人は賞賛の言葉を惜しまないだろう。しかしそのあまりにも美しい行為ゆえに、その輝かしさのために隠されてしまっている事実がある、とセールは指摘する。

山奥の集落から麓の村に降るキャラバン隊に合流して、ヒマラヤの谷を下ってゆくタンタンとチャンの一行を岩山の影から見つめる雪男の後ろ姿が、この漫画の最後のコマである。タンタンとチャンは、山にこだまして聞こえる雪男の悲しげなうなり声を聞きながら、「もしかしたら…<sup>(15)</sup>」とつぶやきつつヒマラヤの峰々を振り返る。問題はこの最後のコマの場面である。

『聖書』の「ルカによる福音書」に、「善きサマリア人」のたとえ話がある<sup>(16)</sup>。セールが言うには、タンタンのこの物語は、「善きサマリア人」のたとえ話と同じ被害を被っているというのである。このたとえ話は、隣人とは誰かという問いに対して、イエスが答えたものである。強盗にあって身包みはがれ半殺しにあって路傍に倒れている人を、人々は見て見ぬふりをして通り過ぎる。あるサマリア人がそこを通りかかると、彼はその哀れな人に近寄り、傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで包帯をし、自分のロバに乗せ宿屋に連れて行って手当をした。翌朝彼は宿屋の主人にお金を渡し、このけが人の手当を依頼し、治療にもっとお金がかかれば帰りがけに自分が払うと言って宿をあとにする。強盗にあったこの人の隣人は誰であったかとイエスは問う。もちろん親切に手当をしてやったサマリア人である。このサマリア人のおこないは、人の鏡となるべき善行であろう。人はこのサマリア人の優しい心根に胸を打たれ、このサマリア人のように行動しなくてはならないと考える。

セールの言うには、この物語は二千年前から、誰もが知っているのに、よく理解されていないものなのである。つまり、これらの物語の明々白々の明晰性によって、われわれの目がくらまされて、われわれの理解が妨げられているというのだ<sup>(17)</sup>。かのサマリア人は、たくさんの善意の証をもたらすので、われわれは感動してその教訓をしっかりと胸に刻もうとする。ところが、逆に、それらの善意はそのまばゆい光でもって、真の教訓を隠してしまっているのである。つまり、それらの善意は、真の教訓を隠すためにそこにあるにすぎないというわけだ。目に見える稀少なものは、真の稀少なものを隠している。善きサマリア人の物語においても、同様に善意の行為があれほど並べ立てられているので、われわれはおめでたくも、彼の登場するこの物語がわれわれに教えようとしているのは、追いはぎにあって半殺しにされた負傷者を見たら、その人を助け出し、手当をし、病院まで連れて行って、看護婦に治療代を支払ってやる…といったことだと思込んでしまうのである。そのような善意は、それほど珍しいことではないのではなかろうか。

セールによれば、キリストが生きていた時代には、サマリア人たちの近隣の民びとたちは、サマリア人たちを遠ざけて暮らしており、最も嫌悪すべき敵であるかのように、彼らと彼らの国を憎み、忌避していたので、サマリア人たちのことを、「恐ろしい山人」les abominables hommes des montagnes と呼んでいたほどであった<sup>(18)</sup>。したがってセールの解釈によれば、「福音書の善きサマ

リア人——ここでは、名詞の意味と形容詞の意味が矛盾していることになるが——のたとえ話は、人が思っているように、善意についてはほとんど語っておらず、価値あるただ一つの驚異の計り知れない発見、すなわち、人間のなかの最悪の者、追放され嫌悪される悪党、人類の前での罪人が、人間味に溢れた行動をするという発見を提示している<sup>(19)</sup>というのである。

フランス語では、ヒマラヤの雪男は *l'abominable homme des neiges* と呼ばれている。*homme des neiges* は文字通り「雪男」であるが、それに *abominable* というサマリア人と同じ形容詞が付加されている。*abominable* は「恐ろしい、おぞましい」といった意味である。すなわち雪男は、サマリア人と同じように、恐れられ、忌み嫌われ、山の奥へと追い払われたおぞましい種族である。その「恐ろしい、おぞましい」雪男が、飛行機事故で瀕死の重傷を負い、雪の中に投げ出されて意識を失っているチャンを助け出し、自分の洞窟に連れて行き、手当をし、食物を与え、チャンの命を救ったのだ。誰がチャンの隣人であったのか。チャンに親切にしてやった雪男である。忌み嫌われ、おそれられている雪男は、温かい情にあふれた存在なのだ。岩山の影からチャンの一行を見送る雪男は、後ろ姿しか描かれていない。おそらく彼は涙を流しているのだ。雪男の悲しそうなり声だけが谷に響いている。タンタンとチャンの最後の言葉「もしかして…」は、「もしかしてあの雪男は人間なのでは、人間以上に人間的な存在なのでは…」と言おうとしているのではなかろうか。人々に忌み嫌われている者、そういう人こそが、実は本当に人間味にあふれた人間なのであり、真の隣人なのだ。距離的、文化的、言語的、人種的に、いかに隔てられていようとも、その者こそが隣人なのだ。タンタンの物語も、サマリア人の物語も、このことを語っているのだというのが、セールの解釈である。地理的・心的な距離を超えて、最も隔てられ疎んぜられた者を最も大切な隣人として愛すること、そのことこそが隣人愛なのである。タンタンは、人間と雪男を隔てる地理的・心的な距離を一步一步踏破し、苦難の末に真の隣人愛に到達したのだ。

#### IV、仮想空間

ところで、人と人とを隔てるこうした地理的・心的な距離は、近年の様々な先端技術によって、劇的に短縮されつつある。とりわけ、情報機器の発達と普及によって、われわれはほとんど世界中のどこでも、誰とでも瞬時にコンタクトすることができる。このような意味において、世界中の人間はみな「隣人」となったのだ。地球の反対側で起こった大事件の映像が、ほとんどその日のうちに各家庭の茶の間のテレビに映し出される。われわれはそのような大事件に驚かされることはあっても、地球の裏側の映像がほとんどリアルタイムで送られてくることにもはや驚きはしない。昨年、2001年9月11日、アメリカで起こった同時多発テロの際に、旅客機が突っ込み炎と黒煙を上げる世界貿易センタービルの映像を、テレビ報道により、ニューヨークの住民と同時にあるいは彼らよりも先にリアルタイムで見た日本人は多い。日本からの友人や身内の電話によって事件を知り、急いでテレビをつけたニューヨーク在住の人さえもいるという。またわれわれは、何千キロ離れて

いてもテレビ会議を開くことができるし、いっしょに仕事をすることもできる。われわれは一步も動くことなしに地球の裏側にまで移動しているのと同じことである。このような現在のわれわれの日常のあり方についてセールは次のように問うている。

いったいそうした会議はどの土地でもたれているのだろうか。パリのわれわれの会議室だろうか。それとも相手方の友人が応答しているフィレンツェだろうか。それともどこか中間に位置する場所だろうか。いやそうではない。<sup>ヴァーチャル・サイト</sup>仮想的な場においてである。場所にかかわる古くからの諸問題、あなたと私、われわれはどこで話しているのか、われわれのメッセージはどこを通ってゆくのか、といった問題は、新しい時代が別の空間をしつらえたかのように、氷解し拡散しているように思われる<sup>(20)</sup>。

現代社会は、すでに久しい以前から、有線や、無線や、海底ケーブルや、人工衛星によって、この地球上に絶え間ないコミュニケーションの機構を確立しようと努力してきた。その結果、セールの言うように「この地球の時空は日付変更線に穴が穿たれ、一日という時間の差異が消し去られてしまった<sup>(21)</sup>」かのごとくである。このようにしてわれわれが対話するとき、その対話がおこなわれている場所がどこであるかという問題について、セールはさらに考察を続けている。

その対話は、ここでおこなわれていて、私はここで話し、ここで相手方の話を聴いているのだろうか、あるいはその対話は遠方でおこなわれていて、その遠方で友人のほうに私に問いかけ、私の話を聞いているのだろうか。あるいはその対話は同時に二つの場所で、つまりあちらとこちらで *hors et là* おこなわれていて、ここだけの話だが、しかじかの出来事が同じ場所で同時に、起こりかつ起こらないということを禁じている第三項排除の原理〔排中律〕に反する事態が生じているのだろうか。同様に、ニュージーランド、南アフリカ、スカンジナビア、フランスなどに分散したわれわれ三、四人が、テレビ会議を開催するとき、これらの地域が重なり合う地点をどこに設定すべきだというのだろうか<sup>(22)</sup>。

場所にかかわる古くからの諸問題は多岐にわたり簡単に論ずることはできないが<sup>(23)</sup>、ここで問われている場所に関する第三項排除〔排中律〕の問題は、アリバイの問題とも通底する。刑事事件において、犯行のおこなわれた同じ時間に、被疑者が別の場所にいたことが証明されれば、アリバイが成立しその人の嫌疑は晴れる。同一の人物が同じ時間にあちらとこちらにいるということはいえなからである。もしセールの言うように、同じ一つの会議が同時にあちらとこちらでおこなわれうるとするならば、あらゆるアリバイは効力を失ってしまう。われわれはあらゆる情報やコミュニケーションの技術によって、同時にあちらとこちら *hors et là* に存在しうる存在、つまりアリ



バイの成立しえない存在になったのだろうか。

ところで、セールがここで用いている「あちらとこちらで *hors et là*」という表現は、モーパッサンの短編『オルラ』 *Le Horla* <sup>(24)</sup> から想を得ている。この奇怪な短編においては、モーパッサンの分身である語り手「私」は、自分の分身であるオルラ *Horla* につきまとわれ、苦しめられている。オルラがにここにいるのは確かなのだが、彼を捕まえることも彼の姿をはっきりと見ることもできない。この物語の姿なき主人公の名前「オルラ *Horla*」は、フランス語の *hors* (「～の外に」の意) と *là* (「ここに」の意) を組み合わせて作られた造語である。それゆえオルラは、ここにいてかつここにいない存在であり、またあちらにいてかつこちらにいる存在である。彼は排中律にも、矛盾率にも反する、反合理的な存在である。オルラはいわば<sup>ヴァーチャル</sup>仮想的な空間に住まっている存在なのである。

しかながら、すでに指摘したように、われわれもまた、様々な情報・コミュニケーション機器によって、仮想的な空間に住まう存在になっている。現代人はみな「オルラ的存在」 *être hors-là* になってしまったわけだ。この「オルラ」 *Horla* はまた、ハイデガーの言う「現存在」 *être-là* (ここにある存在) と対置される存在である。われわれが「オルラ的存在」 *être hors-là* になったのであれば、われわれはもはや「現存在」 *être-là* (ここにある存在) ではない。セールはこのことについて次のように述べている。

われわれはここにある存在 *des êtres là* [現存在] ではない、というのもしばしばここにいないからというだけではなく、われわれは存在 *des êtres* ですらないからである。なぜならわれわれは、好きなように、自分自身の外に出るからである。つまり、私は思考し、行動し、働き、話す、ゆえに、私は自分の外 *hors de moi* におり、この外 *hors là* にいるのである [オルラなのである] <sup>(25)</sup>。

現存在 *des êtres là* (ここにある存在) と決別したこのオルラ的存在は、自分自身の外に出てどこへ行くのだろうか。オルラとなったわれわれ現代人は、あらゆる距離を乗り越え、仮想的なネットワークを通して全世界へと赴くのではなからうか。

## V、局所から全体へ —— アルゴリズムの道

幾何学はかつてギリシアで生まれた。この学問は、澄みきったギリシアの空に輝く太陽のように、ギリシア的明晰性と明証性の世界である。それゆえ、古代ギリシアで生まれ、ヨーロッパで育った幾何学は、ユークリッド幾何学にせよ非ユークリッド幾何学にせよ、明確な公理や定理からなり、いかなる曖昧さもない。こうした幾何学は現在でもあらゆる学校の数学でそのレベルに応じて教えられている。しかし、たとえば、三角形の内角の和は二直角に等しいとか、二直角より大きいとか、平行線は交わらないとか交わるとか言うとき、われわれはどのような三角形や、平行線を思い描い

ているのだろうか。小さな三角形や平行線だろうか、巨大な三角形や平行線だろうか。重さや質量をもたないこの幾何学上の三角形や平行線は、われわれの身の回りにある現実の自然界に存在しているのではなく、われわれの頭のなかに、あるいは空虚な宇宙に、存在している<sup>ヴァーチャル</sup>仮想的な三角形や平行線であると考えることができる。幾何学はしたがって仮想世界を扱う学問であると言えよう。

現実の充満した世界を扱う場合、たとえば地理学上の地図を作製する場合はどうだろうか。地図を描くためには、かつて伊能忠敬がおこなったように、全国各地を一步一步歩き回り細かく測量しなくてはならない。もちろん現在では航空写真による測量が併用されるが、一枚一枚全国くまなく丹念に写真に収めなくてはならないことには変わりはない。複雑に入り組んだ海岸線や山の起伏は、幾何学のいかなる公理や定理にもしたがわれない。測量によって地形を写し取るより仕方がないのだ。伊能忠敬は、日本全国を一步一步丹念に歩き回り、日本全図を完成させたのであり、公理や定理を用いて一挙に日本全体を作図したのではない。一步一步歩いてゆくことによって全体に到達したのだ。測量における三角形は、幾何学におけるような抽象的・仮想的な三角形ではない。現実に存在する三つの地点を結ぶ三角形でなくてはならず、そのようにして実測された三角形一つ一つによって全土をくまなく覆ってゆかなくてはならない。

人工衛星も航空機もなかった時代に、そのような三角形の網の目で全地球を覆ってゆくとしたら、それは気が遠くなるほど大変な作業である。だが現在では、たとえばインターネットによって、ほとんど全世界の人々が一人一人網の目状に結びついている。その一人一人をたどりつつ各人が世界全体に連なり、世界全体の方も一人一人をたどりつつ各人につながっている。一人一人が連なった網の目で世界を覆っているわけだ。そこには中心もなく末端もない。というより、一人一人が中心でありかつ末端なのだ。かつて筆者の子供の頃、もう何十年も前のことになるが、一般の家庭にはまったく電話もなかった片田舎では、夏休みなどの長期休業中に学校や子供会等からの連絡を伝えるための連絡網というものが存在していた。近くの者から近くの者への連絡の順路が決まっていて、連絡を受けた者は次の順番の者へと順々に伝える。そうすることによって地域中の生徒たちに、比較的短期間のうちに連絡が通ずるようになっていた。もちろん電話はないから徒歩によって伝えるのである。このようなかつての連絡網の方式によって、世界中に散らばる一人一人を順番に従って徒歩でつなげてゆくとすれば、それは気の遠くなるような時間がかかり、明らかに不可能であろう。しかし現在の情報・コミュニケーション技術を用いれば、その一步一步は、光の速さでおこなわれる。われわれは一步一步の行程をとりながらも、瞬時にして世界の全員とつながることができるのである。皮肉なことに、コンピューター・ウイルスが瞬く間に世界規模で蔓延することが、このことを証明している。一步一步という膨大な時間のかかるやり方と、瞬時になされるという矛盾する願望とが、何の矛盾もなく二つながら実現されるのだ。

ところで、一步一步手順を踏んでゆくというやり方はアルゴリズムの方法であるのだが、セールによればこの方法はバビロニア時代に遡るものである<sup>(26)</sup>。したがってこの方法は、古代ギリシア

で生まれた幾何学よりも古いものである。しかしこの方法は、コンピューターの出現以来、最も新しいものとなった。それゆえこの方法はまた一步一步進んでゆくやり方と、瞬時に全体に到達するやり方という二つの方法を縫い合わせ、旧と新との二つの時代を縫い合わせるものである。またこの方法は、すでに見たように肖像や複写といったシミュレーションの技術を司り、卓越した近似性によって実存に、すなわちもろもろの特異性にアプローチするものである。「アルゴリズムの方法は、このようにして局部から全体へと移行する新しい道を示唆するものであるのだが、古典的な理性は、明晰性と抽象性をそなえた一般的なものや全体的なものにもっぱら専念しているがゆえに、この新しい道が信頼のおけるものだとは思ってもみないのである<sup>(27)</sup>」とセールは指摘している。彼がその著作『哲学を讀んで』のなかで示唆しているように<sup>(28)</sup>、手順的数学 *mathématiques procédurales* の謂いであるアルゴリズムは、*procéder* [手続きをおこなう] という語の絶対的な意味で、手続きをおこなう。つまり一步一步手続き〔手順〕を記述し、もろもろの道の集合による方法を記述してゆくのであるから、アルゴリズム的方法は、地理学的であり、地図作製法的であると言える。一步一步、しかし光の速さで、手続きをおこなうことによって、アルゴリズム的・シミュレーション的方法は、われわれが理性と呼んでいたあのギリシア以来の明晰性・明証性に追いつくのである。先に引用したセールの言い方を借りれば<sup>(29)</sup>、「複写の学問であり、充滿した世界の学問である地理学」が、「法則の学問であり、空虚な宇宙の学問である幾何学や力学」に追いつくのだ。セールが言うには、「新しい地図帳<sup>アトラス</sup>が教えること、すなわち、この新しい地理学は、旧来の諸科学のなかの最も厳密なものにも比肩する。そして哲学は、この古い諸科学をまねてきたがゆえに、いまや突然古色蒼然たるものになってしまう<sup>(30)</sup>」のである。

われわれはいまや、新しい諸手段によって、しかしかつての学問によって生み出された仮想的環境を活用して、局所的なものから全世界へ向けてわれわれの参加を延長させる道筋、すなわち隣人から隣人へと一步一步つながる隣人の<sup>グローバル</sup>全世界的なネットワークの道筋を、逆説的にも仮想的な<sup>アトラス</sup>地図帳の上に描き出しているのである。現代のわれわれは、幾何学的な法則の道を通して一挙にではなく、地理学的な道を通して一步一步、しかし光の速さで地理的・心的な距離を埋めながら、全体へと到達しうるのである。

人文地理学という学問領域があるように、地理学は人文科学と自然科学の接点に位置する学問であり、気候や風土や環境をも射程に入れていることから気象学や環境科学をも包含する学問であり、先に考察したように二つの基本的な知の一方を包括する学問である。セールは、従来どちらかといえば地味な学問であり、哲学とはあまりかかわりのなかった地理学を、あえて哲学的思考の前面に押し出すことによって、インターネットや電子メールなどの情報ネットワークに代表される新しい時代の哲学の基礎を提供しようと試みている。このような意味において、セールの思考法は地理学的・アルゴリズム的な思考法であり、彼の哲学はインターネットの時代に求められる新しい哲学であると言えることができよう。

注

- (1) Michel Serres, *Atlas*, Paris, Julliard, 1994, pp.98-99. 傍点は原文イタリック。
- (2) *Ibid.*, p.88.
- (3) *Ibid.*
- (4) *Ibid.*, p.87.
- (5) *Ibid.*
- (6) ラプラス Pierre-Simon Laplace (1749-1827)、フランスの数学者、物理学者。彼はナポレオン時代には政治家としても重用され、上院尚書を務めた。
- (7) アラゴ Dominique François Jean Arago (1786-1853)、フランスの天文学者、測地学者、物理学者。子午線一度の長さの測定に従事し、後にパリ理工科大学教授、パリ天文台長などを務める。
- (8) ラマルク Jean-Baptiste de Monet Lamarck (1744-1829)、フランスの博物学者、ダーウィン以前の進化論者。
- (9) Miche Serres, *op.cit.*, p.87.
- (10) Descartes, *Discours de la Méthode, Corpus des œuvres de philosophie en langue française*, Paris, Fayard, 1986, p.26. 邦訳、デカルト、『方法序説』、『世界の名著』、第27巻、『デカルト』、野田又夫編、中央公論社、182頁。
- (11) Cf. Miche Serres, *Éloge de la philosophie en langue française*, Paris, Fayard, 1995, pp.245-246. 邦訳、ミッシェル・セール、『哲学を讃えて——フランス語で書いた思想家たち』、米山親能他訳、法政大学出版局、237頁参照。
- (12) Cf. *Ibid.*, p.167. 邦訳、同書、160-161頁参照。
- (13) Michel Serres, *Atlas, op.cit.*, pp.17-18.
- (14) Hergé, *Tintin au Tibet*, Belgique, Casterman, 1960.
- (15) *Ibid.*, p.62.
- (16) 『聖書』、「ルカによる福音書」、第10章、25-39節参照。
- (17) Michel Serres, *Atlas, op.cit.*, p.252.
- (18) *Ibid.*, p.253.
- (19) *Ibid.*
- (20) *Ibid.*, p.12.
- (21) *Ibid.*, p.186.
- (22) *Ibid.* 傍点は原文イタリック。
- (23) 「場所」にかかわる諸問題については下記を参照されたい。中村雄二郎、『中村雄二郎著作集』、第X巻、『トポス論』、岩波書店、1993年。
- (24) Guy de Maupassant, *Le Horla, Œuvres complètes de Guy de Maupassant*, Paris, Louis Conard, 1927.

- (25) Michel Serres, *Atlas, op.cit.*, p.187. 傍点は原文イタリック。
- (26) *Ibid.*, p.18. また下記も参照されたい。Michel Serres, *Éloge de la philosophie en langue française, op.cit.*, pp.229-241. 邦訳、『哲学を讃えて——フランス語で書いた思想家たち』、前掲書、223-234頁。
- (27) Michel Serres, *Atlas, op.cit.*, p.18.
- (28) Cf. Michel Serres, *Éloge de la philosophie en langue française, op.cit.*, pp.229-231. 邦訳、『哲学を讃えて——フランス語で書いた思想家たち』、前掲書、222-224頁参照。
- (29) 注(12)参照。
- (30) Michel Serres, *Atlas, op.cit.*, p.18.